

## ◆◆◆ インド洋の島、モーリシャスでの気候変動プログラム調査について

このたび、モーリシャス気象局より要請のあった、レーダーなどを含む気象システム高度化について、その必要性と妥当性を調査するため、JICA（国際協力機構）業務で4月30日から5月26日までモーリシャスを訪れる機会に恵まれました。

モーリシャスは、インド洋の南西部（南緯20度、東経57度）に位置し、アフリカ大陸から東へ約2,000 km、マダガスカル島から東へ約900 kmの洋上の島国です。同国は、モーリシャス島（面積1,868 km<sup>2</sup>）、ロドリゲス島（面積108 km<sup>2</sup>）、アガレガ2島（26 km<sup>2</sup>）、セントブランドン諸島などからなり、総面積は2,045 km<sup>2</sup>（東京都と同じくらい）、人口は1,277,853人（統計データはいずれも中央統計局資料2009年末による）で、民族的には、インド系、クレオール系が大部分で、街の雰囲気はアフリカよりはインドに近いようです。また、ヒンズー教（50%）、キリスト教（32%）、イスラム教（17%）が混在しており、ヒンズー教の色どりにぎやかな寺院のほか、重厚な玄武岩で作られたキリスト教の教会、イスラム教のモスクがあり、朝晩はコーランの朗読が街に流れていました。

モーリシャスは、以前はサトウキビの島でしたが、ほとんど全島がサンゴ礁に囲まれており、1年中気候が温暖なことから、近年、観光業が同国の大きな産業になっています。加えて、18世紀にフランス、19世紀半ばからはイギリスに領有されていたため、英語・フランス語がホテルではもちろん、街の市場などでも話す人が多く、言葉のストレスが少ないことも相まって、ヨーロッパ（主にフランス・イギリス）から毎日直行便が運航されるほど、ヨーロッパの人々にとってはリゾートとして人気のある島です。今回はリゾートホテルに泊まる機会はありませんでしたが、多くのホテルでは、フランス料理をはじめ各国の食事が楽しめるほか、ゴルフやプライベートビーチでの様々なマリンスポーツなどが楽しめるようになっています。観光客のほとんどはあらゆるサービスが提供されるホテルに滞在しバカンスを過ごすようで、街ではあまり見かけませんでした。

2010年ワールドカップが行われた南アフリカは治安が悪いことで有名ですが、モーリシャスは治安も良く、昼間は一人で出歩いても、身の危険を感じるような場所はありません。また、他のアフリカの国ぐにと違って政治が安定していることから、国民の平均所得も一人あたり実質191,654モーリシャスルピー（52.4万円）あり、アフリカではトップクラスに位置しています。

今回の訪問中、モーリシャス国の総選挙があり（5月5日）、他国から選挙監視団が派遣されるなど、他のアフリカ諸国と同様に警戒態勢がとられ、投票日は外出を自粛しましたが、投票日翌日の6日には開票が終了し、翌週には新しい内閣が組閣されるなど、安定した政治が行われていました。折しもバンコクではデモが繰り広げられ、その様子がTVで毎日報道されており、政治が安定していることが、治安の良さ、経済の順調な発展、国民所得の向上に重要な要素であるとの印象を強く持った次第です。

さて、「南の島」というと、地球温暖化による海面上昇などの影響が心配されています。同国の気候変動に関する報告によると、海面上昇による土地の損失は、国土の0.5%にのぼると見積もられており、また、サンゴ礁のない一部の地域では、海岸浸食が深刻で、海岸線が10mまたはそれ以上浸食を受けている箇所があるとのこと。写真は、サンゴ礁の途切れた部分にある海岸です。浸食を防ぐため、蛇かごに石をつめて波による海岸浸食を食い止めようとしているのですが、蛇かごの基部が浸食されており、大型のサイクロンなどが襲った場合、蛇かごと破壊される可能性があります。海岸浸食や海面上昇を含む、地球温暖化への適応策の検討は、モーリシャスでも大きな課題となっており、UNDP（国際連合開発計画）を通して日本の資金による気候変動適用プログラムが南西インド洋地域で現在進められているところです。



今回の調査の目的は、モーリシャス国から、熱帯低気圧により影響を受ける同じ島国である日本に対し、気候変動に伴うサイクロンをはじめとする自然災害に対する防災能力への技術協力を求められ、協力の妥当性を評価することにあります。同国では、フランスを始めとする技術援助により、数値予報モデルや気象衛星の画像を利用した気象予測が恒常的に実施されており、また、1960年に同国を襲った大型サイクロン以降、サイクロンに対する防災体制が整備され、警報レベルに応じて、各省庁・報道機関・警察・民間の役割を細かく規定し実際に運用するなど、気象・防災の面でもアフリカ地区ではトップレベルの体制と技術を有しています。モーリシャス島は、日本からはるかに離れた島ではありあますが、同じ島国として日本の気象観測・予測技術や経験は、同国にとって少なからず貢献できるのではないかと期待しています。

遠くて近い国モーリシャスとの国際協力が気象という側面を通してさらに強くなり、日本の技術がインド洋の地でも役立てられること、両国の交流がさらに進むことを期待して、今回の渡航の報告といたします。

(財団法人気象業務支援センター振興部長代理 登内道彦)